

「手のどが痛い。村に帰りたい」。
3人の少年が口々に訴えた。

カトマンズの中心部近くのカーペット工場。薄暗い作業場に、手織りの機織り機が並んでいる。糸くずが、ほこりとなって舞う。せき込む音が聞こえる。劣悪な環境の中、子どもの作業員は大人に交じり、朝6時から夜10時まで働く。休みは、ほとんどない。

「帰りたくないの？」。ブッディー・マン・タマン君に話しかけてみた。14歳というが、身長120センチ足らず。

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

12〜13歳にし

か見えない。

「父さんが前借りしている。帰れない」。

ブッディー君は現場監督の目を気にしながら、小さな声で答えた。

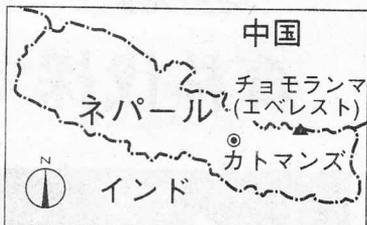
「楽しい時は？」。仕事していない時。

「つらい時は？」。「病気になる時」。

「病気になる時」。

「父さんが前借り 帰れない」

ブッディー君は4カ月前から働いている。月給は600ルピー（ルピーは約2円だが、父が3000ルピーを既に持ち帰った。母は5年前に亡くなった。姉、妹、弟がいる。家族の生活は苦しい。



カーペット産業は輸出の花形だった。児童労働が欧米で報道され、消費者が不買運動を起こした。このため、1992年に約2000あった工場のほぼ半数が倒産。当時、15万人に上った子どもの作業員も約3000人まで減った。だが、年齢を偽って働かせているケースも多い。「病気になるしたら、薬を買って寝るしかない。病院はお金がかかるし」。ブッディー君は泣きそうになった。こうした工場から保護された子どもたちのためのリハビリセンター。8歳から15歳までの110人が、寮で暮らしている。12歳の少女、スクマヤ・ラムチャンは、カトマンズ南のヘトウタ市出身。父が病気になるまで働けなくなった4年前、母とカーペット工場へ。半年後、母が逃げ出して1人になった。「よく監督にたたかれた。ずっとお金も服もくれなかった」。

センターには、保護されて来た。今は楽しい。学校にもきちんと行ける。

夢は医者になることだ。「病気の父を治してあげたい。しっかりした人間になれば、母もたずねてきてくれるかもしれない」。ひとみが輝いた。センターは、入寮者を200人まで増やす計画だ。それでも工場にいる子どもたちの1割にも満たない。ブッディー君がスクマヤちゃんと同じ夢を見る日は、遠い。

文 蓮見 新也
写真 懸尾 公治



狭い作業場、過酷な労働のカーペット工場で働く少女らのひとみも暗い
ネパール・カトマンズ市内で

カーペット工場の児童労働

● 病院建設にご協力を 「目に見える援助を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地で進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970-9-12891）